

成功する秘訣はVWだ



成功する秘訣はVWだ

京大iPS細胞研究所長 山中伸弥さん

米グラッドストーン研究所長からの言葉



「長期と短期のビジョンを持ち、短期を達成することで長期をかねる。それが成功につながります」 東京都左京区、滝沢美穂子撮影

ビジョン持ち医療の道開く

再生医療や創薬など新しい医療への道が期待されるiPS細胞(人工多能性幹細胞)。その扉を開いた言葉が、「VW」だった。ビジョン(Vision)を決め、ワーク・ハード(Work hard)、一生懸命に研究することを表す頭文字だ。

VWとの出会いは1993年、遺伝子の働きを研究した米国のグラッドストーン研究所だった。ロバート・メイリー所長が若手研究者20人を集め、「研究者として成功する秘訣はVWだ」と語った。Wは人一倍、研究に励んできたので自信があった。メイリー所長に「ビジョンは？」と問われ、「いい論文を書くこと」と「や」いい職につくこと」と答えた。すると「それはゴール。何のために研究を？」と問われた。

なぜ、研究者になったのか。神戸大時代、ラグビーをしていて脊髄損傷で体を動かせなくなった人がいた。整形外科医になり、骨のがんで脚を切断した高校生を診た。整形外科医から研究者へ転じたのは、医学の限界に、「新しい治療法で立ち向かいたい」と考えたからだ。

その「新しい治療法」が具体的なビジョンになったのは2000年、奈良先端科学技術大学院大の助教授になりたてのときだ。「人の皮膚や血液から、どんな細胞にもなる万能

細胞をつくる」。まさにiPS細胞のことだ。周囲には海外の有名科学雑誌に論文を載せた教授らがおり、研究室の学生集めに苦心していた。「画期的なビジョンがあれば新入生が来てくれるのでは」。だが、「実現に20〜30年かかり極めて困難」という予想は伝えなかった。研究室に、現在、京大iPS細胞研究所講師の高橋和利さんら3人が入った。

03年に教授となり、06年には研究チームとのワーク・ハードでiPS細胞をマウスの皮膚細胞から、1年後には人の皮膚から作った。12年にノーベル医学生理学賞に輝いた。「ビジョンがなければ、研究チームも、iPS細胞も出来なかった」

iPS細胞の誕生から10年、京大の研究所で30チームが再生医療や創薬の実現を目指す。基金を立ち上げ、寄付金集めにマラソン大会出場、研究の環境整備に腐心する。「『多くの人を救う新しい治療法』というVのためにWを。二つの文字に支えられています」(平出義明)

1962年生まれ。「研究の進展と広がりには研究者と研究支援者の安定的な雇用が不可欠」としてiPS細胞研究基金への寄付を求めている。問い合わせは、基金事務局(075・3666・7152)へ。